

音読の変化と黙読の発生からみる読書行為
 -読書時の忘我に注目した発達過程と歴史的変遷の考察
 Concerning reading aloud and silent reading
 -consideration of developing processes and historical
 transformation with taking note of self-oblivion on reading

布山美慕†
 Miho Fuyama

† 大阪大学
 Osaka University
 miho02@sj9.so-net.ne.jp

Abstract

The purpose of this study is to investigate the developing process and historical transformation on reading by interdisciplinary approach. The author focuses on the process of changing how to read: Reading aloud and silent reading, and on enthusiasm states such as self-oblivion and absorption. The results of consideration, the developing process and historical transformation on reading are schematized.

Keywords — reading aloud(音読), silent reading(黙読), self-oblivion(忘我), absorption(没入, 没頭)

1. はじめに

読書についての研究は多様な分野で行われてきた。例えば、歴史的研究、社会的研究、さらに文献学、テキスト論、認知科学、認知心理学、による読書研究である。それらの研究対象、方法、興味関心は様々であり、それぞれの研究を対応させることは少なく、またそれを求められることも少なかった。

しかしながら、異分野の研究成果には、対応させて考えることが出来る内容も多く、総合的な見直しをすることで、これまで十分な理解が困難だった事象を扱いうる可能性がある。

本研究では特に、音読から黙読への読書方法の変遷時に注目する。さらに、読書能力の発達と、読書への没入や没頭、忘我といった熱中状態を軸にして、分野横断的な考察を試みる。音読から黙読への読書方法の変遷に注目したのは、読書方法の変化が起こる際に読書行為の特徴が明瞭になると考えたためである。また、没入や没頭、忘我など、読書への熱中を軸にしたのは、読書行為の状態や読書対象との関係が、このような熱中状態に顕著に現れると考えたからである。

具体的な考察は、歴史的事例研究から特徴的な一事例を取り上げ、それに関係する異分野の研究

成果を整理・比較して行う。歴史的事例研究に対して取り上げる他の研究分野は、読む能力の発達過程の研究、音読時・黙読時の読解過程の研究、物語への没入・没頭についての研究である。

さらに、多分野の研究を扱うにあたって、下記二つの仮説を検証する。具体的な仮説検証を行うことで、多分野にわたる考察において問題意識を明確に議論できると考えた。

- 仮説1: 熱中や忘我にも種類があり、それらは音読や黙読という読書方法の変化に対応している。
- 仮説2: 読書方法、その読書方法に使用される人の能力、熱中状態、読書方法の変化を引き起こす人々の意識変化、の4者には相互に関係があり、図式化できる。

2. 音読と黙読に関連する先行研究

2.1 音読と黙読の種類

歴史的事例研究とそれに対応させる研究を取り扱う前に、音読と黙読を以下のようにさらに分類した。音読・黙読は、実際には多様な種類の読書を含んでおり、下記のように分類することで、多分野間の研究での対応と比較が容易となると考えた。分類は、今回取り上げる先行研究、および黒田(2011)[1]を参考に行った。特に黙読に関しては、自分が読書をするときに、頭の中で文章を読み上げる声が聞こえるか否かで分類し、これは、あとで取り上げる内的音韻化の有無に関係していると考えられる[2][3]。

音読の種類

1. 他の人が読むのを聞く『聞く音読』
2. 自分が自分に読む『読む音読』
3. 自分が他の人に読む『朗読』

黙読の種類

1. 頭の中で『声の聞こえる黙読』
2. 頭の中で『声の聞こえない黙読』

例外はあるものの、音読と黙読の各段階、どちらも読書能力としては、上記の分類で下に行くほど高度であると仮定した。今回の考察に関わるのは、このうちの『聞く音読』『読む音読』『声の聞こえる黙読』である。

2.2 歴史的事例研究

まず、本研究で他研究を用いての検討対象とした歴史的事例研究を説明する。

歴史的な研究として、黙読がいつ、どのような状況で生まれたか、について、様々な時代と場所に対して考察がされてきた。

ヨーロッパでは、初期の黙読事例としてアウグスティヌスの『告白』のなかの記述や、黙読の発生として中世の修道院における写字生が必要に迫られて行ったとする論が有名である[4][5]。併せて、「連続記法」と呼ばれる切れ目のない記述方法から、現在行われているような単語ごとに切れ目をいれる「わかちがき」の発明が黙読へと変化する技術的転換点であると論じられている[4][5]。

日本の黙読の発生については、前田愛『近代読者の成立』(2001)[6]や辻本雅史『「学び」の復権』(2012)[7]、永嶺重敏『<読書国民>の誕生』(2004)[8]などで論じられている。主に、明治期前後、いくつかの思想と方法で黙読が発生したとされる。例えば、『「学び」の復権』では、素読が音読ではなく、中国語の意味をそのまま理解するために黙読を推奨する例であるとか、『<読書国民>の誕生』では、黙読が可能な人と不可能な人のいさかいなどが過渡期の出来事として取り上げられている。

本研究では、このような多様な歴史事例の研究から、アルカイック期と古典期のギリシャにおける黙読の発生を論じた、ジェスペル・スヴェンブロ『アルカイック期と古典期のギリシャ』[5](以下A論文)を取り上げる。この研究を取り上げる理由は、黙読の発生理由を単に「必要性から」「技術的可能性から」とせず、人々の意識変化と音読から黙読への変化の関係を詳細に論じており、歴史的・社会的な研究に留まらず、今回考察する異分野の読書研究との関連が深いと考えられるからである。

A論文で、音読の変化と黙読の発生がどのように論じられているか、整理すると以下のようになる。

1. アルカイック期と古典期のギリシャでは、音読が基本であった。さらに、「読むこと」は苦役であり、書き手の道具になり、自由を失い、自分を文章の再生装置として明け渡す、いやしいことと考えられていた。そのため、奴隷などに読ませて聞く、『聞く音読』が行われていた。
2. 次第に、文字は自ら声をあげるもの、文章は再生装置を内包するものと考えられるようになり、「読むこと」=「支配されること」という認識が無くなった。そして、読むことへの抵抗感が薄らぎ、自ら音読するようになった。
3. この意識変化は普及していた劇に由来する。劇では、役者が自ら声を上げて演じ、観客はそれを苦勞せず受容すればよい。さらに、現実とフィクションが、舞台と観客席という形で明確に分離されている。読書行為が、この観劇行為に対応して考えられるようになった。
4. 次の段階として、書かれた物の精神世界への内面化が行われた。即ち、読者の心の中で読書行為が行われるようになった。対応して「心に刻む」という比喻も用いられる。加えて、歴史家などの専門家に、多量の読書の必要が生じ、黙読が発生した。
5. しかし、この黙読は、口承文芸の音を重んじる伝統から、『声の聞こえる黙読』であった。更に、この『音』の重要性が堅固だったため、一部の専門家以外に黙読が広がることはなかった。

A論文でのこれらの考察は、碑文に使われている「読む」という動詞や、劇の記録・台本など、当時の資料を用いて行われている。

この事例のポイントは、初期段階の読書行為は、自分で自由に思考することができないほど苦勞する行為であり、そのため、自分を作者に明け渡すいやしい行為と見なされていたということである。この認識が、自分の思考や感情を保ったまま読書できるようになるにつれて変化していく。これは、次にみる読字能力の発達と対応していると考えられる。

また、黙読の段階で、書かれた物が内面化されている。読書内容への熱中、没入や没頭、忘我はこの内面化に関わる。つまり、理解が容易になり、それが現実とは切れていることを前提として初めて、書かれた物の内面化が明に受け入れられ、そのプロセスに忘我や没入、没頭が関係する。しかしながら、自分を失うことが嫌われているため、忘我状態は多くの場合忌避されていたと想定され、作者との仮想的な対話への没入や没頭の可能

性が高い。

A論文の不足点や問題点は、各段階の読書に必要な能力、各段階の読書状態、次の段階の読書に移行する必然性など、いくつかの点で曖昧さが残ることである。次節から、これらの点を補いうると思われる関連異分野の研究を整理する。

2.3 読む能力の発達過程

2.2.に上げた歴史的研究と対応させることができる、読む能力の発達過程について、ディスレクシアに注目して書かれたメアリアン・ウルフの『ブルーストとイカ』(2008)[9]では次のようにまとめられている。

1. 文字を読めない段階
2. 読字初心者の段階
 - 音韻・音素の認識の発達
 - 意味の理解
 - 文脈の把握
 - 意味の多義性への理解
3. “解読に取り組んでいる読み手”の段階
 - “解読”から、“流暢な読み”の段階へ
 - 考える時間の確保
 - 感情を伴う読解
4. 熟達した読み手の段階
 - “流暢な解読者”から“戦略的な読み手”へ

大きくまとめると、単語の認識、逐次読みの段階から、文章解読の段階へ、そして「読み」の自動化に伴って考える時間や感情の確保が可能になり、その後は予め読解方略を持って読む戦略的な読み手へと成長して行く。特に、思考を伴う読書に移行する頃、黙読が発生しており、このことは次の注意資源の研究とも合致する。

上記は個人の読字能力の学習・発達過程を示したもののだが、先の歴史的な読書行為の変遷とも重なる部分がある。このことは、個人の発達と集団の読書の発達過程が同一だということではなく、個人の読字能力の学習・発達の最終段階が歴史的に進展してきたと考えることができる。読字能力の学習・発達の最終段階を決定していたものは、先の歴史的事例からは、人々の読書に対する意識や必要性であったと類推される。他にも、この個人の発達段階は、例えば、意味の理解に手間取り、考える時間を確保できない能力の個人が集まる集団において、読書がどのような文化的事象となりうるかという考察を可能とする。

2.4 音読時・黙読時の読解過程の研究

音読と黙読の読解過程の違いについて、理解程度、注意資源、音韻化、構音運動などについての多くの先行研究が行われてきた。ここでは、2.2の歴史的事例に関係すると思われる研究をピックアップする。

2.4.1 音韻変換と注意資源

これまで、読字モデルとして、ロゴジェンモデルやトライアングル・モデルなど、種々のモデルが提唱されているが、音韻変換に注目し簡略化した音読と黙読のモデルとして、高橋麻衣子『文理解における黙読と音読の認知過程—注意資源と音韻変換の役割に注目して—』(2007)[2]で仮定された認知過程がある(図1)。図1のような音読と黙読のモデルで興味深い点は、黙読の経路における、音韻表象を経ずに意味表象(命題表象)に至る経路(黙読②)の存在である。高橋の研究では、黙読と音読における音韻変換と文理解の関係、および注意資源の差を、構音運動の抑制とタッピング課題によって実験的に調べている。具体的には、黙読時の構音運動の抑制によって文理解が妨げられる読み手を音韻変換あり群とし、それ以外を音韻変換無し群とわけ、それぞれの音読時・黙読時の文理解をタッピング課題有り無しで実験している。

この実験の結果では、1.黙読時は音韻変換あり群の方が無し群よりも文理解度が高い、2.音韻変換あり群は黙読の方が音読よりも文理解が高い、となった。しかし、類似の研究結果との整合性や実験過程の二重課題などのため、結論は検証が必要であるとして留保されている。

関連の研究結果として興味深いものは、文章記憶に関わる研究である。森敏昭『文章記憶に及ぼす黙読と音読の効果』(1980)[10]では、読解成績は黙読と音読に顕著な差が無いが、記憶に関しては、音読は一時的な文章の逐語的な記憶、黙読はより長期的な文章内容の体制化した記憶に対して有効であるとしている。つまり、音読は具体的で逐語的な読解過程であるが、黙読はより抽象化された内容理解を伴うと考えられる。

高橋の実験に戻ると、3.音読時のタッピング課題では文理解度に影響は無かったが、黙読時のタッピング課題は文理解度を低下させた、という結果が出ている。この結果は、黙読での読解成績は読み手に利用可能な注意資源の量に依存するが、音読においては読み手に利用可能な注意資源の量に関わらず一定の読解成績を保つという仮説を支持するものであるという。解釈としては、音読では、

単語への注意と発声に強制的に注意資源を割り振ることになるが、黙読では、読み手自身が注意資源の割り振りをコントロールすることになり、これがタッピング課題による注意資源の減少によって阻害されたとされている。また、割り振りの複雑化による阻害も考えられるだろう。

以上から、留保があるとはいえ、次の点への言及が、歴史的事例研究に関係して重要であると考えられる。

1. 音韻表象有り無しの二種類の黙読があること。
2. 音読時は単語認識や発声に注意資源を必要とするが、強制的に注意資源を確保することができる。一方黙読は注意資源の配分など、さらに別の読書テクニックが必要となること。

つまり、理解程度と読みの方法についての関係は留保であるが、黙読に二種類あり、音読よりも黙読の方が高度な読書能力である。また、音読が具体的理解と逐次的記憶に有利なのに対し、黙読は抽象的理解と体制化された記憶に有効な傾向があるといえる。

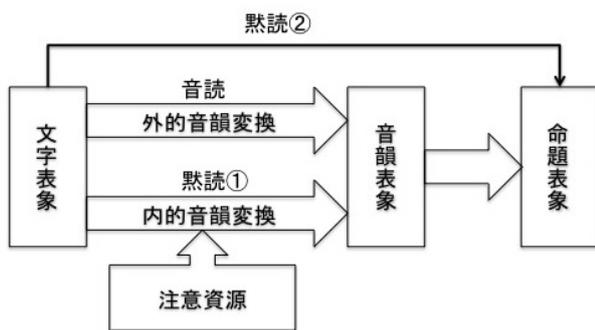


図1 高橋麻衣子『黙読と音読による文理解の違い』[2]より

2.4.2 黙読における聴覚言語イメージの個人差

さらに、黙読において音韻化有りの経路を間接的な経路とし(図1の黙読①)、音韻化なしの経路を直接的な経路(図1の黙読②)として、黙読時に間接的な経路を経る人と直接的な経路を経る人とで、黙読の速度や理解程度を比較した研究が、井上智義『黙読における聴覚言語イメージの個人差』(1984)[3]である。井上はまず同音異義語を用いた実験で、間接経路を用いる群(P群)と直接経路を用いる群(V群)を分けた。その後800字程度のテキストを刺激材料に、音読、黙読、速読させて、読書中の眼球運動を測定し、一停留当たりの平均文字数や読書速度、平均停留時間を求めた。そして、これらの値をP群とV群で比較した。

結果、間接経路を用いるP群では、黙読時に音読に近い測定結果を示し、聴覚言語イメージを伴って読んでいることが示唆された。一方、直接経路を用いるV群では、黙読時はむしろ速読に近い結果であり、早い処理を効果的に用いて、意味を取りながら読んでいると考えられた。

この研究でも、黙読に二種類あることが仮定・検証されている。間接経路と直接経路は高橋の研究での音韻変換の有無に対応し、両者の研究結果は併せて理解することができる。注意資源に注目すれば、その割り振りを熟達させた読み手の場合、黙読の方が音読よりも効率的な読みとなり、そのことが、黙読の速読化に繋がっているのではないだろうか。

2.4.3 節まとめ

2.4節における以上の研究を合わせると、音読と黙読の特徴を次のようにまとめることができる。

- 音読...読書行為に強制的に注意資源を割り振ることができ、初学者向けの読書方法。しかし、黙読よりも非効率な注意資源の使用となる可能性があり、具体的理解と比較的短期の逐次的記憶となる。
- 音韻化有りの黙読(『声の聞こえる黙読』)...音読に近い黙読。音韻化を行うことで、強制的な注意資源の確保がある程度行われるが、発声を伴わない分、高度で効率的な読書となっている。
- 音韻化無しの黙読(『声の聞こえない黙読』)...速読に近い黙読。音韻化を行わないことで、注意資源の効率的な割り振りが一層要求される高度な読書。その代わりに、効率的で抽象的な理解と、比較的長期の体制化された記憶が可能になる。

2.5 物語への没入・没頭についての研究

歴史的事例から考えて、音読と黙読で異なるのは、内容の合理的理解だけではなく、感情過程や内容への没入、没頭、忘我など熱中状態を含む。何故なら、読むことの忌避や観劇行為とのアナロジー、書かれた物の内面化など、多様な読書中の意識が関係し、これらは内容理解の観点からでは説明できないからである。読んでいるときにどのような状態であるかということが、読書行為をどのようなものと捉えるか、さらにはどうして読書をしたのかという動機に関係し、それが音読と黙読という読書行為ごとに異なると考えられる。

これに関連する認知や心理学の研究として、物語への没入や没頭を扱った研究がある。ここではその一つである、小山内秀和『物語理解に伴う主観的体験を測定する尺度』(2011)[11]を取り上げる。

この研究では、文学作品への態度、反応、思考についての個人差を測定する、文学反応質問紙(LRQ: Literary Response Questionnaire)の日本版(LRQ-J)の作成を行っている。その過程で、どのような質問項目が採用され、どのような因子分析が行われたのか、そしてそれら因子間の関係や、他尺度との関係をどのように考察しているのか、それらを確認することで物語体験にどのような要素があるのか考察することができる。そして、それらの要素が、音読と黙読、どちらに関係が深いのか考える。

もともとのLRQはMilaa & Kuiken(1995)によって作成され68項目からなっているが、日本版のLRQ-Jはそれを日本向けに改訂し、37項目の尺度になっている。この尺度は次の5因子に因子分析されている。

- 第1因子 “物語世界への没入”：物語情景の鮮明なイメージ化や登場人物との同一化あるいは共感を示す9項目
- 第2因子 “読書への没頭”：現実から離れて読書にのめりこむ体験や読書への傾倒を示す7項目
- 第3因子 “作者への関心”：作者の持つ関心、意図、その文体などに興味を持つ傾向を示す7項目
- 第4因子 “現実の理解”：物語での出来事や主人公などから自己や現実世界への洞察を深める側面を示す7項目
- 第5因子 “ストーリー指向”：ストーリーの面白さ、展開にみられる動きなどが読解の動機づけとなる傾向を示す7項目

例えば、第1因子の項目は『物語を読んでいると、それが本当に目の前にあるもののように感じられることが時々ある』、第2因子の項目は『私は、普段の仕事を忘れてしまうくらいに小説に没頭するのが好きだ』などである。

37項目が下位尺度間で相関があったとはいえ、5因子に因子分析されたことは、この5因子が分けられること、特に、没入と没頭が分けられることを示した点で興味深い。

更に、関連が指摘されている他尺度と、作成したLRQ-Jの関連を調べている。他尺度としては、空想傾向を測定する尺度であるCreative Experience Questionnaire(CEQ)、ファンタジーや感覚体

験、宗教体験などさまざまな想像活動への関与を測定する尺度であるImaginative Involvement Inventory(III)、7つの感覚モダリティにおけるイメージの鮮明性を測定する尺度であるQuestionnaire upon Mental Imagery(QMI)、ストレス状況下における自我の制御を測定する尺度であるCalifornia Adult Q-set 版 Ego-Resiliency(CAQ版ER)を取り上げている。

これら他尺度との関係の結果は、まずCEQとIIIはLRQ-Jの殆どの因子と相関が見られている。さらに、CEQでは第1因子“物語世界への没入”に比べて第2因子“読書への没頭”が相対的に低い相関となっているのに対して、IIIはどちらも中程度の相関となっている。この違いは、没入と没頭の違いが現れていると解釈されている。

このように区別された没入と没頭の違いを、音読と黙読という行為に関係させて考察すると、音読では、発声を伴うため、読書の能動的行為の側面が強調されていると考えられる。つまり、詩の朗読と同様、その音の響き、声を出すという行為自体への没頭である。一方で黙読にはそのようなパフォーマンス的な能動的行為は存在せず、没頭は内向きとなる。従って、音読の方が内容よりも行為に対する没頭傾向が強いと考えられる。それは前節で見たように、構音運動に強制的に注意資源を必要とすることからも裏付けられる。よって、例えば、『読む音読』『声の聞こえる黙読』『声の聞こえない黙読』をしているそれぞれの読み手に、このLRQ-Jを試せば、何らかの相関が見られる可能性があるだろう。

その他の尺度、QMIとは全ての因子で有意な相関を示し、ER尺度とは弱い相関を示していた。これらの項目も物語理解に深い関係があることが示されている。

LRQ-Jは読書対象を物語に限定しているとはいえ、読書時の状態要素として、想定できる因子を示したものである。文化的背景が異なるA論文の読書にそのまま適用することは難しいが、前述の他の研究と併せて参考とすることができる。

3. 歴史的事例先行研究の捉え直し

歴史的事例研究を、2.3~2.5で検討した他分野の研究成果から捉え直す。いくつかの節で既に言及した部分があるが、ここで改めて検討する。

まず、読む能力の発達をまとめた内容からは、発達に伴い、一文字一文字の認識から、単語、意味、文、文章、の理解へと進み、さらにその内容を自分で思考し、感情を持つという段階に進んでいくことがわかる。これは、文字の認識に注意資

源が多く必要となる段階から、次第に自動化が進み、読解に必要な注意資源が減少し、その分思考や感情過程へと注意資源が使用されることを示していると考えられる。

一方、音読と黙読の注意資源を比較した研究から、音読では注意資源が構音運動とも関係して、強制的に一定程度確保されることが想定されている。

以上を併せて考えると、音読で読解に確保されていた分の注意資源が、黙読では思考や感情過程に割り振られる可能性がある。音読と黙読の理解程度の実験で、整合性のある結果とならなかったことは、このような思考や感情過程を考えにいれていないことが原因の一つと考えられる。音読でも、思考や感情過程は発生しているが、注意資源が有限であるとすれば、思考や感情過程に向けられる注意資源は音読では減少しているだろう。

A論文に戻り、各読書の段階を考える。

はじめ『聞く音読』の段階では、書かれた物を読むことは、書かれた物に支配され、自らの自由を失うことであった。これは、読書に熟達していないために、自らの思考や感情過程に注意資源を振り分けることが出来ず、読解過程に留まる状態であることを示していると考えられる。そのため、自由に思考し感情を持つために、読解を奴隷など他人に任せ、いわば読解過程を外部化している。

次の段階として、文字が自らしゃべりだし、自分で音読をするようになるという『読む音読』の段階があった。この段階は、読書能力が発達し、その為に音読を行いながら、ある程度思考や感情を抱くことができる段階であると考えられる。構音・発声を行い、注意資源を読書に強制的に振り分けながら、読んでいる。

さらに、『声の聞こえる黙読』の段階となる。この段階は、音韻変換有りの間接経路を経る黙読に対応し、読書の速度が早くなり、読解の自動化が進み、思考や感情過程に振り向けられる注意資源が音読時よりも増えた段階であると考えられる。書かれた物の内面化が起こったのも、黙読が音読よりも抽象的理解を促す読書方法であったことが一因だと考えられる。

一方、それぞれの段階の読書における熱中について考えると、『聞く音読』の段階では、内容への深いコミットメントは、作者への同一化として回避されたと考えられ、熱中するとしても、多くは一緒に聞いている現実の人間との議論であったと予想できる。

次の『読む音読』の段階では、読解を行うことの

負荷がまだ大きく、構音や発声への没頭が起こっていたと考えられる。また、観劇が一つの読書行為のモデルであったが、観劇自体が年に数回の行事であったため、この代替として劇を読むこともされていた[12]。よって、このような『劇』を読む時、人々はまさに劇を見るようなつもりで読んでいたと予想できる。これは、LRQ-Jの中の、第1因子『物語世界への没入』の質問項目、「物語を読んでいると、それが本当に目の前にあるもののように感じられることが時々ある」や「小説の中の会話が、まるで実際の会話を聞いているように聞こえることがしばしばある」などに該当する可能性があっただろう。よって、没入体験に近い状態があったと予想できる。

最後の『声の聞こえる黙読』の段階では、この没入に加えて、書かれた物の精神世界への内面化が指摘されている。それまで、自分とは切れた劇場＝外部の出来事として、書かれた物を経験していた人々が、自らの内面に、書かれた物を取り込んでいくということは、内容への没入のみならず、自分と書かれた物の境目が少しだけ緩くなり、忘我に繋がる可能性を示唆する。

4. 仮説の検討

はじめに立てた仮説を検討する。

仮説1.熱中や忘我にも種類があり、それらは音読や黙読という読書方法の変化に対応している。

検証結果：今回の考察では、具体的に仮説1を検証することができなかった。没入や没頭など、LRQ-Jの因子として分けられている項目もあるため、熱中には没入、没頭というような種類があり、分けることができると考えられる。また、注意資源の観点から、音読では読書行為自体、構音運動などへの没頭が起こりやすく、黙読では内容への没入が起こり易いことが予想される。しかし、それらの予想を確認するにはいたらなかった。分類の整合性を確認したうえで、音読と黙読の各読書方法との関連性を改めて検討する必要がある。

仮説2.読書方法、その読書方法に使用される人の能力、熱中や忘我の状態、読書方法の変化を引き起こす人々の意識変化、の4者には相互に関係があり、図式化できる。

検証結果：取り上げた歴史的事例を例に、読書行為を図2のように図式化した。さらにこれから読書行為の構造を抜き出したものが図3である。

当初想定していた4者以外に、いくつかの要素を加えた。図2の上段を用いて説明すると、はじめ、読書能力＝読むことが困難、よって読書方法＝

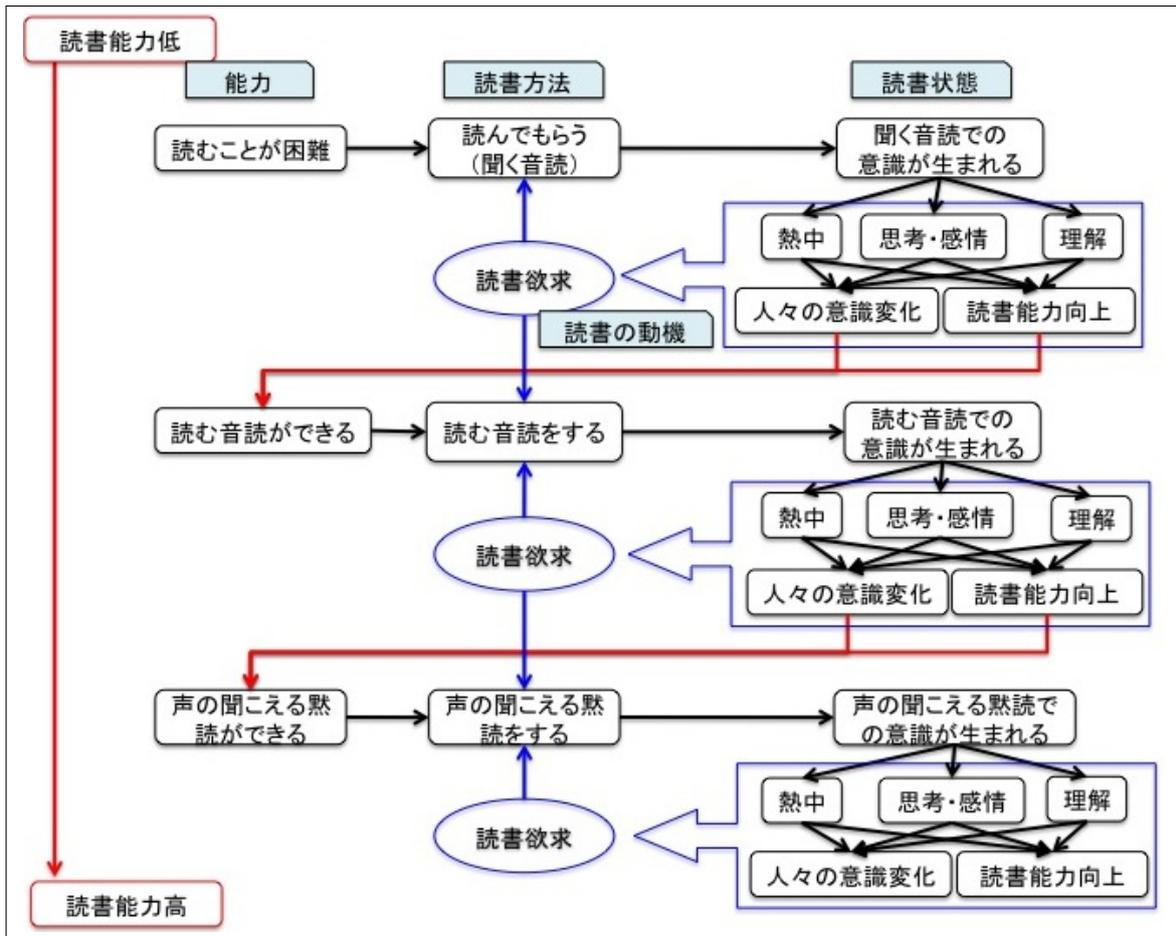


図2 アルカイック期と古典期のギリシャでの読書 図

聞く音読が行われ、固有の読書状態が生まれる。この状態には、没入や没頭、忘我を含む熱中、内容理解、読解による内容理解以上の思考・感情などを含み、さらに、人々の意識変化や読書能力の向上に繋がる。この読書状態の各要素が、読書欲求の原因となる。また、人々の意識変化や読書能力の向上は次の段階の読書能力=読む音読ができる、を生むことになる。

歴史的事例研究である A 論文において、特に研究されていた部分は、読書状態のうちの人々の意識変化であった。一方、認知科学などその後で検討した研究において主に研究されてきた部分は、読書方法の特性とそれによって生まれる読書状態のうち、理解や思考・感情過程であった。

この図において重要な点は、読書欲求という要素を取り入れることで読書行為をループにした点、さらに読書能力の発達によってそのループが次のループに繋がっていく点である。まず、読書能力があっても、読書をしようとする動機がなければ読書が行われることはない。この読書を行おうとする動機を読書欲求とした。読書欲求は、これまでの考察から、主に読書状態での理解に関係する社会的な必要性、読書状態での思考・感情に

関係する娯楽性、読書状態での熱中や忘我、没入、没頭に関係する一種中毒的な快楽性からなると考えられる。さらに、人々の意識変化や読書能力の向上は社会的状況の変化を生んで読書の必要性・娯楽性にも関係し、また個人単位では快楽性に影響すると考え、これらの要素を含んだ読書状態全体を読書欲求に繋げている。この読書欲求は読書方法に繋がり、再度読書行為を行わせる。このように読書が継続的に行われることで、人々の意識変化や読書能力の向上が積算され、少しずつ一段階上の能力が必要とされる読書過程に移行することになる。つまり、別のループへと移行する。

図式化したことによって、読書欲求の重要性和、読書行為のループ、ループ間の移行が明確になった。

5. 結論

読書について、歴史的事例研究を中心に多分野における検討を行った。

取り上げた歴史的事例研究に対して関連させた異分野の研究は、歴史的分析に整合する部分があり事例研究の裏付けとなるとともに、歴史的な研究分野では詳細に研究することのできない読書能力

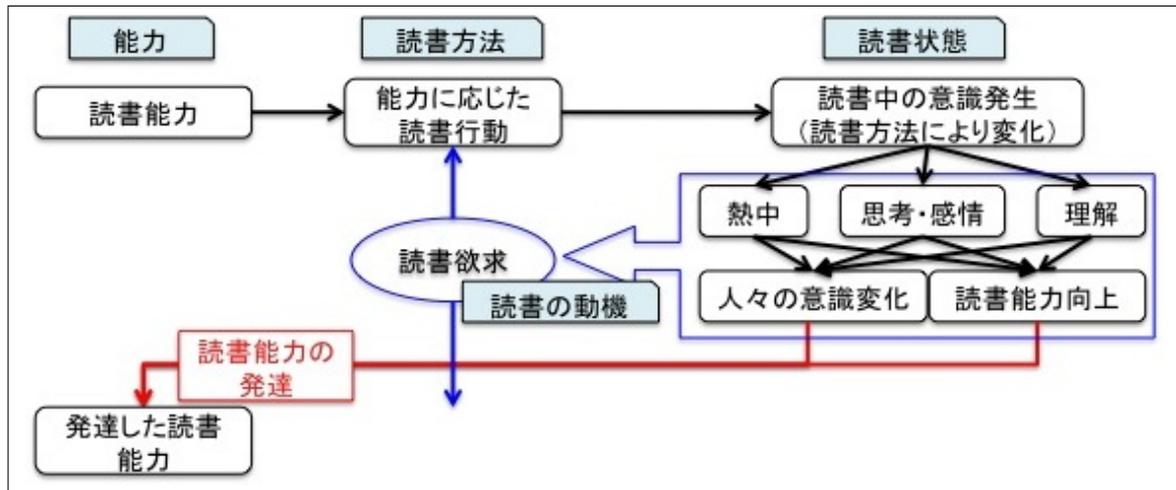


図3 読書行為の変遷 図

と読書状態について大きな示唆となった。

さらに、読書行為の図式化を行うことで、読書に関連する要素間のループとその発達過程を明確にできた。

今後の課題は以下の通りである。

今回の考察には、読書行為を行う対象である、「物語」などの読書対象が含まれず、図式にも含まれていない。例えばW.イーザーの受容理論[13]では、作品が読書行為を導く機能を有しているとされている。このように、没入や忘我などの熱中は、人の読書能力だけでなく、作品（物語など）の力によって引き起こされていると考えられる。よって、読書行為は、本来は、この作品の機能との関係を持たなくてはならない。人の機能のみで完結することは出来ない。読書行為の一般的な図式化を行うには、作品の機能との関係性についても検討する必要がある。

また、A論文の他に、日本の明治前後の黙読の発生についても現在考察を進めている。現在までにわかったことは、漢文の音韻化を禁じてその意味を取る読書が必要とされた事例があり、これが『声の聞こえない黙読』に対応する可能性があるということである。明治前後には、他にも様々な黙読発生の事例が存在するが、しかし、どの階級のどの黙読の発生に注目するかによって黙読発生の経緯が異なる。よって、読書の図式化は、その一つ一つのループは図3と同様であるが、発達の仕方はA論文のように一つの道筋ではなく、枝分かれなど複雑な経路が予想されている。今回の図式化の有効性を、このような他事例を用いて検証することが必要である。

また、今回取り上げた研究は、読書研究のほんの一部である。関係する研究の関連性を一層検討

する必要がある。

参考文献

- [1] 黒田航, (2011) "黙読時にヒトは何をするのか?" 黙読の多様性に関する予備調査" 2011年度認知科学会第28回大会発表論文
- [2] 高橋麻衣子, (2007) "文理解における黙読と音読の認知過程" 教育心理学研究, 55, 2007, pp.538-549.
- [3] 井上智義, (1984) "黙読における聴覚言語イメージの個人差" 心理学研究, Vol. 54, No. 6, pp351-357
- [4] アルベルトマンゲル(1999) 『読書の歴史 あるいは読者の歴史』 柏書房
- [5] ロジェ・シャルティエ/グリエルモ・カヴァッロ編(2000) 『読むことの歴史』 大修館書店
- [6] 前田愛(2001) 『近代読者の成立』 岩波書店
- [7] 辻本雅史(2012) 『「学び」の復権』 岩波書店
- [8] 永嶺重敏(2004) 『<読書国民>の誕生』 日本エディタースクール出版部
- [9] メアリアン・ウルフ(2008) 『プルーストとイカ 読書は脳をどのように変えるのか?』 合同出版
- [10] 森敏昭, (1980) "文章記憶に及ぼす黙読と音読の効果" 教育心理学研究, 28, pp57-61
- [11] 小山内秀和, (2011) "物語理解に伴う主観的体験を測定する尺度 (LRQ-J) の作成" 心理学研究, Vol. 82, No.2, pp.167-174
- [12] 森谷宇一(1976) 『読むことの発達とギリシア悲劇』 岩波書店
- [13] ヴォルフガング・イーザー(2005) 『行為としての読書』 岩波書店